

2つの病院の統合とともに生まれた、安全で快適に使える水まわり環境。



2F外来の多目的トイレは、誰でも使いやすい機能を備えているとともに、デザイン的にも美しい空間。清掃のしやすい壁掛け大便器、巻上巾木を採用している。使い方をガイドする音声機能も付いているため、目の見えない人でも安心して利用できる。

全国に先駆けた大きな取り組みとして、2つの市の市民病院が統合し、地域医療の画期的な再生モデルが誕生しました。2013年5月、掛川市立総合病院と袋井市立袋井市民病院が一つになり、中東遠総合医療センターが開院。一刻を争う心筋梗塞や脳卒中などの急性期医療の体制も整備された33科、500床の新しい病院は、11の医療機能をセンター化し、災害拠点病院としても地域に貢献します。

特に救急医療体制を強化し、迅速かつ高度な診断・治療の拠点に。

2006年に、袋井市と掛川市の双方で、今後の病院のあり方に関する検討委員会が設けられてから、さまざまな障害を乗り越え、およそ7年の歳月を経て統合が実現しました。新しい病院では、特に救急医療体制を強化し、脳卒中や心筋梗塞などの一刻を争う循環器系疾患に対して、迅速かつ高度な診断・治療のできる体制を整えています。

また、医療機能を最大限に発揮させるため、救急センター、心血管内治療センター、脳血管内治療センター、脊椎・脊髄センター、手術センター、内視鏡センター、睡眠医療センター、血液浄化センターなど、11の医療機能をセンター化。診療科の域を越えた、最適な医療を展開できます。さらに、福祉・行政機関と連携して在宅介護までの総合的な医療体制の構築をめざしています。



ヘリポートも整備し、緊急搬送に備えている。手前に見えるのが雁行した外来ブロック。

【中東遠総合医療センター】

- 竣工年月／2013年3月
- 所在地／静岡県掛川市菖蒲ヶ池1-1
- 施主／掛川市・袋井市病院企業団
- 設計／株式会社久米設計
- 病床数／500床
- 延床面積／約44,521㎡
- 構造規模／鉄骨造(免震)地上8階建て



ロビーに設けられたレリーフは、多摩美術大学学長・五十嵐威暢さんの作品。ここでくり抜かれた部分は看護師さんなどのスタッフが磨いて再利用し、2Fの小児外来のレリーフとして使われている。





1Fのロビー。2層吹き抜けの開放的な空間であり、ホスピタルモールを軸に、受付や会計窓口、A～Dの外来ブロックが並んでいる。



1F 平面図



2F外来トイレのサイン。男性用トイレのブースにもベビーチェアが設けられている。



2F外来の男性用トイレでは、清掃のしやすい壁掛け小便器を採用している。



2F泌尿器科外来に設けられた流量検査室。部屋の両側に入口が設けられ、患者さんは待合スペース側から、スタッフは反対側から入れて使いやすい。フロースカイと呼ばれるトイレ型の尿流量測定装置が備えられ、尿の勢いと量を測定し、プリントアウトしたりカルテに取り込むことができる。

みんなが使いやすい施設にするため、患者さんとスタッフの動線にも配慮。

建物の1Fにはホスピタルモールと呼ばれる広い空間を軸に、受付や会計窓口、雁行型の外来が並んでいます。2Fにも4つの外来があり、反対側には血液浄化センターや人間ドック・健診センターなどを設置。3FにはICUや救急病棟、血管造影室や手術室などがあり、緊急患者の受け入れがスムーズにできます。同じく3Fのリハビリ室は、屋外のリハビリ庭園へと続いています。

動線は患者さんとスタッフを明確に分け、基本的にレイアウトの内側を患者さんの動線、外側をスタッフの動線とし、みんなが使いやすい施設になるよう工夫されています。

経営管理部の方からの声

現場の意見を吸い上げる努力は、かなり行いました。



中東遠総合医療センター
経営管理部 管理課
施設物品係 主任
柴田武洋さん

以前の掛川と袋井の病院が、いずれも築30～35年で老朽化が進み、医師不足の問題などもあり、今回の統合移転となりました。移転にあたっては、18のワーキンググループが集まって会議を行ったり、50分の1スケールの図面を基にヒアリングを行うなど、現場の意見を吸い上げる努力はかなりしましたね。トイレに関しては、感染対策の看護師からの強い要望で、

便器の床が下に接していない壁掛けタイプを可能な限り採用。便器の下までモップが入るし、とても清掃しやすいとのことでした。



2F外来の女性用トイレでも、壁掛け大便器などを採用。ベビーチェアが設けられている。

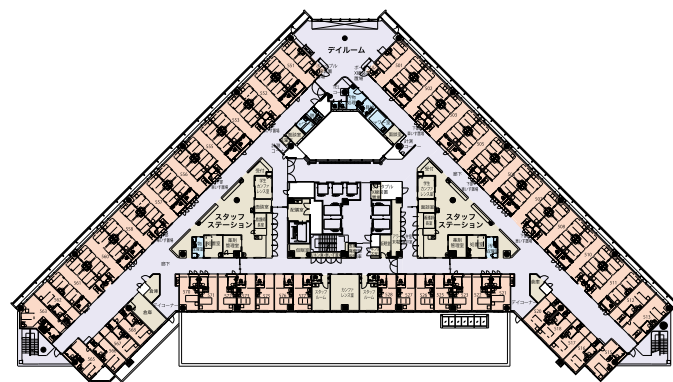
日当たりを重視した、明るい療養環境。 「管理のできる水まわり」にも配慮。

建物は免震構造の8階建てで、北向きの三角形の形状をしています。これは、日当たりの効率を均等化するとともに、見晴らしのよい眺望を確保するため。たいへん明るく快適な療養環境が生み出されています。三角形の斜辺を利用したレイアウトは、スタッフがフロア全体を見渡しやすいというメリットもあります。

4Fから上が病棟で、一つの階に東西2つの病棟を配置。ベッド数は全部で500床あり、そのうち個室がおおよそ3割で、その他は4床室となっています。

4床室の室内にはトイレを設けるとともに、個室にはトイレ・シャワーユニットを設置。急性期医療が中心であるため、特別室以外

には浴槽を設けず、シャワーのみとしています。また、各フロアにも、一般用、車いす用、寝た姿勢のまま使えるシャワー室の3タイプを用意しています。



5F平面図



広い窓から外の景色がよく見える4床室。トイレは入口側に設けられ、患者さんへの配慮のため、背もたれ、L型手すりなどが備えられている。



4床室のトイレの向かい側に設けられた洗面台。照明を工夫するなど、まるでホテルのようなインテリアが施され、大きなミラーもたいへん使いやすい。



エレベーターホールには明るくリズミカルなデザインが施され、病棟の部屋も分かりやすく表示されている。



廊下をセットバックさせて設けられた、通行を妨げない手洗器。看護師がスタッフステーションまで戻らなくても手洗いができる。



スタッフステーションの入口に設けられた手洗器。水はねが少なく、自動水栓で非接触であるため、衛生的である。



病棟のオストメイト対応の多目的トイレ。L型手すり、跳ね上げ手すりなどが設けられている。



3Fのリハビリテーション室から続く屋外には、心地よいリハビリ庭園が設けられている。



病棟個室のトイレ・シャワーユニット。急性期医療が中心であるため、特別室以外には浴槽を設けずシャワーのみとしている。



個室のトイレ・シャワーユニットには、L型手すりやI型手すりのほか、シャワー時に腰掛けられる、跳ね上げ式のスツールも設けられている。

設計担当の方からの声

災害時の運用を議論し、プランを策定しました。



株式会社久米設計
設計本部
医療福祉設計部 主査
安藤知さん

設計のプロポーザルで求められた大きなテーマは「災害対応」と「環境」。万一の時にも災害拠点病院としての役割を果たすため、建築形態も含めて環境を取り入れることを提案しました。「分節雁行型外来」と呼んでいる4つのブロックに分かれた外来は、患者さんの待合スペースやスタッフのワークエリアにも自然光を取り入れることができます。そうしたエコはBCP

にもつながり、自然採光を確保すれば、災害時に照明として大きな電力が必要ありません。また、災害時に病院で生活を継続するプランも、3日で復旧した場合、1週間、3週間の場合と、3段階に分けて対応をスタッフの皆さんとシミュレーションし、策定していきました。

主な災害時対応(BCP)について

- 800kWの非常用発電機を2台用意
- 240t分の受水槽を確保
- エントランスの大きなキャノピーの下部をトリアージのスペースに
- 1Fホスピタルモールの壁面に、非常用コンセント、医療ガスの接続口を設置
- 敷地内(建物外)に簡易マンホールトイレを20カ所設置
- 2階建ての備蓄倉庫にペットボトルの水、食料、資機材を備蓄

手洗いのできる場所を数多く設置し、スタッフも安心できる環境を整備。

感染対策への配慮から、スタッフステーション以外にも、廊下など、手洗いのできる場所を多く設けています。自動水栓を採用し、非接触とすることで、感染防止を強化。現場の要望が施設づくりに反映され、患者さんはもちろん、スタッフも安心できる環境が整えられました。

看護師長さんからの声

手洗器の仕様など、感染対策に配慮しました。



中東遠総合医療センター
医療安全・環境管理室
看護師長 感染管理専門官
帯金里美さん

トイレのポイントは、まず清掃のしやすいこと。壁掛け便器で、床巻き上げを基本にしています。手洗器は、基本的に腕までしっかり洗えるゲースネックの自動水栓を採用。水はねを抑えるボウルは、オーバーフローの付いていないものを採用し、感染対策に配慮しています。以前の病院の病室は6床室が多く、トイレはフロアの中に集中配置していました。それで仕方なくポータブルトイレを使うことも多かったです。病室の中にトイレがあると、リハビリにもなるしとてもいいですね。



かわいいデザインが施された小児病棟の廊下。



4Fのデイルーム。窓からリハビリ庭園が見える。



小児病棟の4床室の、高さ600mmの洗面台。



小児病棟の多目的トイレ。跳ね上げ手すりやL型手すり、背もたれなどが設けられている。